

山での救急対応時の判断基準は？

1月の終わり。鈴鹿・御在所岳で県連盟の積雪期救助訓練が実施された。スノーマウントという方法でシェルター作りをしている仲間の一人に、「だいぶうまくなつたな」と声をかけたら、手が止まった。言われたことが一瞬、理解できなかったらしい。

「雪を掘るのがうまくなつた、って言ったんだ」
「え、ほんとですか？ わあ、褒められたの、初めてです」

雪を掻く速度が速くなった。年明けに北アルプスでやった氷雪技術講習会で、受講生の彼女が褒められたのは、持っているいいスコップぐらいなものだったのだ。

この日は無風、晴れ。雪の斜面に陽が当たってポカポカと暖かい日になったが、前年の救助訓練は、雪が舞う寒い日だった。そうだった、明日で一年になる。近くで起きた事故の搬出・搬送作業を手伝うことになって、救助訓練がそのまま救助活動になったのだ。

今回は、救急対応時の“判断”ということについて考えてみたい。

事故者を背負う前に

同じ御在所岳でこんな経験もある。
鈴鹿スカイライン沿いの小屋でごろごろしていたら、親父さんから、

「いま、一の谷新道で、ひとり、登山道から落ちて動けない、っていう連絡があった。下ろすのを手伝ってほしいか」

と声がかかった。周りにいた仲間たちと、登攀具を担いで登山道を駆け上がった。

事故者は登山道から足を踏み外したらしく、10mほど下に落ちて止まっている。石で頭を打っているようだが、意識はあって、パーティーのメンバーの呼びかけにもきちんと返事をしていく。現場は、登山道の間点より少し上の樹林帯の中だが、急な道を登り返すよりは、そのままスカイラインまで下ったほうが早い、道の状態を考えると、ザイル担架より、交替しながら背負って下りたほうがよさそうだが、そう判断した。負傷者にヘルメットをかぶせて頭部を保護し、登山道までザイルで引き上げ、そこからはコイルのザイルを使って負傷者を背負った。時間の経過につれて、こちらの呼びかけにはっきり「はい」と答えていた負傷者の声がだんだんと小さく間遠になる。あと少しだ、あと少しでスカイライン

に出る、「がんばれ」、声をかけながら下る途中、突然、頭がガクリと後ろに垂れ、後ろに引つ張られるような荷重がかかった。それでも立ち止まらず、一刻も早く登山口に出ることだけを考へて下り続け、まもなくスカイラインに待機していた救急隊に事故者を引き渡すことができたのだ。だが、夜になって、「残念ながら亡くなりました。死因は脳挫傷でした」という連絡を受けた。

時間的なロスは最小限に抑えて搬出作業はした、病院で手当てを受ければ回復してくれるだろう、そんな期待を持っていただけに、この連絡はやりきれなかった。私たちは、当初、意識があったことに安心し、ケガの状況よりも、一刻も早く下ろすことだけを優先したのだったが、脳挫傷という負傷に対する対応はあれで良かったのだろうか、きちんと傷病を見極め、動かすこととは是非を考えた、別の方法で対処していれば助かったのではないかと、という悔いは今でも頭から離れない。

いつまで続ければ……

話を一年前の積雪期救助訓練に戻そう。私たちがいくつかのグループに分かれて訓練を行っていた時に、その地点の上部のルートに登っていた登山者が沢に転落、死亡という事故が起き

私の登山 ワタシと登山

24

半田ファミリー山の会代表
洞井 孝雄

どんな山がやりたいんだ？

た。お手伝いを、と要請があつて、現場に上がっていくと、事故発生時、対岸の岩場を登っていて転落を目撃したガイドと顧客のパーティーが、滝の下に下りて事故者を引き上げ、心肺蘇生を行っているところだった。交代で人工呼吸と心臓マッサージが続けられたが、問題は、いったん心肺蘇生を始めたなら、しかるべき資格を持つひとの判断がなされるまで、やり続けなければならぬということである。看護師が私たちのメンバーの中にいて、瞳孔が開いて、脈が触れない、という観察結果を報告してくれたが、それが即、心肺蘇生をやめることにはつながらない。すでに開始後1時間半が経つてい

る。舞っている雪が少し強さを増し、滝つぼの両脇の岩の壁を新雪がサーッと流れ落ちるような状態の中で、このまま心肺蘇生を続けるのにも限界がある。そろそろ撤収を考えねばならないのだが、誰も指示を出さない。やむなく、事故者のパーティーのメンバーに、登ってきつたある救急隊を呼び出し、事故者の現在の状況を伝えて、今後の対応を仰ぐようにしてもらった。やっと、「事故者を合合まで下ろしてほしい（心肺蘇生の打ち切り）」という指示が返ってきて心肺蘇生をストップ、事故者をストレッチャーに固定し、ザイルを張って合合まで下ろす作業に移った。悪天でヘリが飛ばず、合合から登山口までは人力による搬送となった。死

因はこれも脳挫傷だった。

前者の例では、傷病の程度の識別と適切な応急処置の判断ができていたら事故者は亡くならずに済んだかもしれない。後者の場合には心肺蘇生など応急処置にあたった登山者が長時間、その場を動けなかった。一定の判断基準と権限を持つてい

スノーマウント(かまくら)作り(2016.1.31 鈴鹿・御在所岳)



ツェルト担架作り、実際に使うことのない技術でありたい。(2016.1.31 鈴鹿・御在所岳)

山で写真を撮るひとは芸術写真を撮るひとはと記念写真を撮るひとはに分かれるようだが、芸術写真を撮るひとも、降りてきてから欲しがるのは記念写真。そう思うと、やはりみんなで撮っておきたいもの。いくら疲れていても、なんだかんだ言っても、カメラを向けたとたん、みんな絶対(とりわけ女性)笑顔を作るんだ。二三の例外はあるが。

「おーい、みんなで写真撮ろう。そこで並んで」全員が一枚に収まるように、近くにいる登山者に、カメラを渡してシャッターを切っていただけようをお願いすることがある。少しでも早く集まって、できるだけ早く済ませることができるよう気を遣うのが普通だと思うのだが、人数が多いと、たいてい一人や二人は、自分の世界に入ってしまった。最後まで「私はいいから……」と、その場所を動かこうとしないヤツがいる。前者はまだかわいいが、後者はめんどくさい。「お前のためだけじゃないぞ。みんなのために入るんだ」うまく言えないけれど、そんなふうになる。「あのとき、こんな顔ぶれだったんだね」と、あとで山行をふり返る記録の色彩が強い。

ひとの足を止めてお願いしていること、みんなの記録なのだ、ということを考えて、「ごちゃごちゃ言わんと、さっさと並ばんかい!」と言いたくなる。みんなで記念写真に納まるのも山の気配り、気働き、心配りのひとつだと思うのだけれど……。

記念写真はあなたのためにだけあるんじゃないぞ

ろすことができたかもしれない、そんな悔いをずっと感じ続けている。

山で事故が起きて、周囲に医師もレスキュー隊もない場合、それに対応することができないのはあなたしかいない、そんな場面に遭遇する可能性がないわけではない。どこかで判断をしなければならぬが、その判断の基準については、消防署や日赤に尋ねても、少なくとも私は、いまだに教えてもらうことができないでいる。

つい先ほどまで元気に登っていたひとなが、自分の背中が亡くなったり、自分たちが下ろしている最中に亡くなったりする経験なんて、もうしたくないなあ、陽だまりの中で、そんなことを思った今年の積雪期救助訓練だった。